

白楽天、仏教徒になれなかった詩人

静 永 健

中国の知識人、つまり儒教を基本とする文化構造の中で「仏教」がいかなる位置に存在したのか。

もとより筆者には、いまだかかる大問題に取り組むべき資格はありませんが、唯一、唐の詩人白居易（白楽天、七三二～八四六）を例として、彼が「仏教」をどのように理解しようとしていたか、「仏教」が彼の詩歌の中でどのように表象されているのかについて、ここに私なりに幾つかの具体例を用意し、本日のシンポジウム（中国社会文化学会シンポジウム「禅と東アジア」、二〇〇八年七月六日）における、このあたりの皆さんの討論のお手伝いをしたいと思います。（1）

一 青年期の白楽天と仏教

白居易は、その七十五年の生涯において約三千首にのぼる詩文を残しています。またその大部分については、彼が、何時、何処でその作品を創作したのかという考証が明らかであり、現在見ることでできる唐詩の中でも、最多にして、かつ最も基礎的な研究の進んだ作品群でもあります。

そこで、白居易が「仏教」に対し、どのような理解を示し

たかについて、以下に、その資料となる作品の幾つかを彼の年齢順に挙げてゆこうと思います。

まず驚かされることは、現存作品中、比較的若い時期に属する二十代および三十代の作品より、白楽天にはひたむきに仏教を理解し、みずからの生きる力としようとするものが見えることです。

感芍藥花寄正一上人

芍藥の花に感じ、正一上人に寄す

今日階前紅芍藥 今日階前の紅芍藥、

幾花欲老幾花新 幾花か老れんとし 幾花か新たななり。

開時不解比色相 開きし時は 色相に比す解はざるも、

落後始知如幻身 落後 始めて 幻の如き身なるを知る。

空門此去幾多地 空門 此を去ること 幾多の地ぞ、

欲把殘花問上人 殘花を把りて 上人に問はんと欲す。

『白氏文集』卷十三、作品番号六六三、二十九歳以前の作）

この詩は恐らく二十代後半の作品だと思われませんが、いわゆる「色即是空」という仏教の最もポピュラーな概念が、若

い詩人の感性によつて、実に軽やかな筆致で表現されています。

また次の作品は白居易三十九歳のものですが、最愛の妻を亡くし、断腸の思いに駆られている親友の元稹（元九）に対し、その死別の悲しみを慰めるために、『楞伽経』四巻の読誦をすすめています（2）。

見元九悼亡詩因以此寄

元九の「悼亡詩」を見、因りて此を以て寄す

夜淚闇銷明月魄 夜淚 闇に銷ゆ 明月の魄、

春腸遙斷牡丹庭 春の腸は遙かに断たる 牡丹の庭。

人間此病治無藥 人間の此の病 治するに藥無し、

唯有楞伽四卷經 唯だ有り 楞伽四巻の經。

『白氏文集』卷十四、作品番号（三八）、三十九歳の作

白居易が果たして何時頃から「仏教」に目覚め、その教説に触れるようになったのか。このことについては、残念ながら今ひとつ明確ではありませんが、しかしその理解は、二十代後半から三十代にかけての頃には、すでに彼の中で確乎たるレベルにまで到達していたことが、これらの作品から読み取ることが可能です。

二 江州左遷における変化

しかし四十代の半ば、ちょうど彼が朝廷内の政争に巻き込まれ、その巻き添えによつて中国南方の江州司馬に左遷されて以降の作品に読み進んでゆきますと、その頃の仏教信仰には、何らかの変化がきざしているように見受けられます（白

居易の江州左遷は元和十年〔八五〕八月、時に四十四歳）。

閑吟

自從苦學空門法 苦ろに空門の法を學びてより、
銷盡平生種種心 平生の種種の心を銷し尽くすも。

唯有詩魔降未得 唯だ有り 詩魔の降すこと未だ得ざる、
每逢風月一閑吟 風月に逢ふ毎に 一たび閑吟せり。

『白氏文集』卷十六、作品番号（四四）、四十六歳の作

右の詩には、仏教による解脱によつてもなお消し去ることのできぬものとして、彼の詩歌創作の欲求——すなわち彼はこれを「詩魔」と名付けています——が、その心の奥底に存在することが告白されています。

また次に挙げる「醉吟二首」においても、こんどは「詩魔」とともに「酒狂」という言葉までもが飛び出し、濟度し得ない自己が素直にさらけ出されています。

醉吟二首・其一

空王百法學未得 空王の百法 學ぶこと未だ得ず、
妬女丹砂燒即飛 妬女の丹砂 焼けば即ち飛びさる。
事事無成身也老 事 事 成る無く 身もまた老ゆ、
醉鄉不去欲何歸 醉郷に去かずして、何に帰せんと欲する。

其二

兩鬢千莖新似雪 兩鬢の千莖 新たなること雪に似たり、
十分一盞欲如泥 十分の一盞 泥の如くならんと欲す。
酒狂又引詩魔發 酒狂 また詩魔を引き立て発すれば、
日午悲吟到日西 日午の悲吟 日の西するに到る。

『白氏文集』卷十七、作品番号（四六）五十六、四十七歳の

作

白居易の左遷地江州（いまの江西省九江市）は、中国仏教の聖地のひとつ廬山山麓のまちであり、しかも白居易は、皆さんご存知のように、その山腹の東林寺近くに「草堂」まで建てた人物であります。しかし大変奇妙なことに、彼は、言わば仏教に近づけば近づくほど、克服できない自己の「詩人としての本性」に気づき、その二者いずれを選択すべきかについて悩みを深めていったもののように見受けられます。

三 五十歳を過ぎて

さて、次に挙げる「郡西亭偶詠」詩は、先の「醉吟二首」から七年後の作品になります。

郡西亭偶詠

郡の西亭にて偶詠す

常愛西亭面北林 常に愛す 西亭の北林に面するを、
公私塵事不能侵 公私の塵事 侵す能はず。

共閑作伴無如鶴 共閑 伴と作すは 鶴に如くは無く、

與老相宜只有琴 与老 相宜しきは 只だ琴有るのみ。

莫遣是非分作界 是非もて分かちて界を作さしむる莫れ、

須教吏隱合爲心 須く吏隱もて合して心とすべし。

可憐此道人皆見 憐れむべし 此の道 人みな見ゆるも、

但要修行功用深 但だ修行・功用の深きを要むるのみ。

『白氏文集』卷五十四、作品番号四三、五十四歳の作

この七年間、白居易は中央の政權交代に伴って長安に戻り、一時は中書舍人という、こんにちの日本で言えば内閣官房長官クラスの重職にまで昇りつめるのですが（長慶元年

「六三」十月、五十歳）、また再び杭州（浙江省）に左遷（長慶二年「六三」七月、五十一歳）、その後、刺史職の任期満了に伴って洛陽に戻ると、またこんどは蘇州刺史に出される（宝曆元年「六五」三月、五十四歳）という目まぐるしい悲運に見舞われます。

そこで、この蘇州での作品には、つとめて心の平静が希求されているように読み取れます。

是非（の心）もて分かちて界（物事の境界線）をつくるなかれ、

すべからく吏隱（半官半隱の態度）をして合して（おのれの）心と為さしむべし。

実はこの頃の白楽天の作品には、他にもこのような傾向の詩句がたくさん見受けられますが、いま特にこの詩句を例に選びましたのは、その最終聯に、世俗一般に見られるところの「仏教」および「道教」信仰に対し、彼自身による疑問の言葉が提示されているからです。

憐れむべし！ 此の道 人みな見ゆるも、

——但だ（世の人々は）修行・功用の深きを要むるのみ。これはつまり、過度の宗教生活に対する強い反発を示したものと言えましょう。

私を見るところ、白楽天の詩歌に表象される仏教（および道教を含む）信仰は、①当初（青年期）の真摯な求道者としての言説から、②四十代以降、次第に懷疑・懊悩する方向へと変化し、そして③五十代以降は、最終的にその信仰生活から挫折し、その教説から少しずつ乖離していったように読み

取れます。なお、この①②③の時期区分は、本稿の第二節・第二節・第三節に対応しています。

四 「不出門」詩の意味するもの

続いては、白居易五十八歳と、七十一歳の二度にわたって詠まれた「不出門」という、これまた奇妙な題名の詩歌を見ていただきます(3)。

不出門

門を出でず

不出門来又數句

門を出でずして来また數句、

將何銷日與誰親

何を將て日を銷し 誰と親しまん。

鶴籠開處見君子

鶴籠 開ける處 君子を見、

書卷展時逢故人

書卷 展ぶる時 故人に逢ふ。

自靜其心延壽命

自ら其の心を靜にせば 壽命延び、

無求於物長精神

物に求むる無くんば 精神長ぜん。

能行便是真修道

能行こそ 便ち是れ真的の修道、

何必降魔調伏身

何ぞ必ずしも降魔調伏の身ならんや。

〔白氏文集〕卷五十七、作品番号三〇五、五十八歳の作

不出門

彌月不出門

月に弥つて 門を出でず、

永日無來賓

永日 來賓無し。

食飽更拂床

食飽きて 更に事無く、

睡覺一頓伸

床を払ひて 一たび頓伸。

輕簾白鳥羽

輕き簾は 白鳥の羽、

新簾青箭筠

新しき簾は 青箭の筠。

方寸與方丈

方寸と 方丈と、

空然兩無塵

空然 兩つながら塵無し。

披衣腰不帶

衣を披つて 腰には帶せず、

散髮頭不巾

髪は散頭には巾せず。

袒跣北窗下

袒跣 北窓の下、

葛天之遺民

葛天の遺民ならん。

一日亦自足

(かくして) 一日また自ら足り、

況得以終身

況んや以て身を終ふるを得るをや。

不知天壤內

知らず 天と壤の内、

目我爲何人

我を目して 何人と為さん。

〔白氏文集〕卷六十九、作品番号三〇六、七十一歳の作

白居易は、なぜ自邸の「門から出ない」のか。その一つの理由は、言うまでもなく、煩わしい世俗のつきあいとの謝絶を意味するのでありましょう。しかし私の考えでは、この詩題にはもう一つの重要な意味が存在していると思います。前者、五十八歳の七言詩の最終聯にご注目頂きたい。

能行こそ 便ち是れ真的の修道、

何ぞ必ずしも降魔調伏の身ならんや。

「降魔調伏身」とは、修行僧、とりわけ仏道に大悟した釈迦その人の姿に他なりません。つまり白楽天は、そのような苦行の果てに求め得るサトリの世界を敬して遠ざけ、「能行(平凡な日常生活の中での修養)こそ真的の修行であると宣言しています。この「不出門」という詩題の第二の意味は、おそらく「不出家」、「不修行」、そして更には「不隱遁」という意味であろうと思われ(4)。

要するに白楽天は、私の理解するところ「仏教徒になれな

かつた詩人」、もしくは「仏教徒になることを拒否した詩人」というふうに結論づけることが可能なのであります。

もちろんこの結論に対しては当然ながら反論もあるかと思ひます。つまり、白居易のそのような一見「仏道修行を否定」するような言説は、やはり仏教に対する深い信仰から発せられたものであつて、彼が否定したのは「仏教」そのものではなく、ナマ半可な世間一般の仏教理解であるという考えです。所謂「仏に会えば、仏を殺せ」であるとか、「経を見て、経を誂まず」などと言つた心境と解釈することも可能なのであります。

しかし、ここで考察の立脚点を白居易の生きた時代から、彼の没後、すなわち中国や日本の後世の人々への影響、という点に移してゆきますと、そこでの白楽天の存在意義は「仏法を大悟した詩人」と言うよりは、標題に挙げましたように最終的には「仏教徒になれなかつた詩人」、更に言えば「修行生活から落ちこぼれた詩人」ということの方が、より大きな意味を持つてゐるように思われます。

五 後世の日本人に受け継がれた白楽天像

まずは有名な菅原道真（八四五〜九〇三）の太宰府での絶唱からご覧頂きましょう。

不出門

菅原道真

一從謫落就柴荆 一たび謫落せられ 柴荆に就きてより、
萬死兢兢踣蹢情 万死 兢兢 蹢蹢の情。

都府樓纔看瓦色 都府樓は 纔かに瓦の色を看、

観音寺只聽鐘聲 観音寺は 只だ鐘の声を聴くのみ。

中懷好逐孤雲去 中懷は 好く孤雲を逐ひ去き、

外物相逢滿月迎 外物は 満月を相逢ひ迎ふ。

此地雖身無檢繫 此の地 身に檢繫する無しと雖も、

何爲寸步出門行 何れぞ 寸歩 門を出でて行かん。

『菅原後集』、延喜元年（九〇二）、道真五十七歳の作。

この詩は従来、九州太宰府に左遷され憂憤の思いに駆られた道真公がみずからの近況を詠じた、言わば「引き籠もり状態の詩」と解釈する傾向にあつたかと思ひます。しかし私は、この「不出門」という詩の題が明らかに白楽天を意識したオマージュであることから、俗世間との交わりを謝絶し、また同時に仏門の救済にすがることもしない、という意味に解釈したいと思ひます。後世の人々の思い描いた白楽天は、現実生活とサトリの世界とのちょうど中間にあつて、そのどちらとも折り合いよくつきあい、言わば双方に不即不離の状態にあるかのような理想的な偶像として考えられていたように思われます。

また、再び話を白楽天の生前に戻しますが、彼は、その最晩年ともいふべき会昌五年（八四五）三月、洛陽の自邸に八名の友人を招き、次のような盛大なイベントを催しています。

胡吉鄭劉盧張等六賢、皆多年壽、予亦次焉。偶於弊居、合成尚齒之會。七老相顧、既醉甚歡、靜而思之、此會稀有。因成七言六韻以紀之、傳好事者。

胡・吉・鄭・劉・盧・張の六賢、みな多年寿にして、

予も亦た焉に次す。偶ま弊居に於いて、合ひて「尚齒の会」を成せり。七老相顧み、既に酔ひて蕩飲せしも、静かに之れを思へば、此の会は稀有なり。因りて七言の六韻を成して以て之れを紀し、好事の者に伝へん。

七人五百七十歳 七人 五百七十歳、

拖紫紆朱垂白鬚 紫を拖ぎ、朱を紆ひ 白鬚を垂る。

手裏無金莫嗟嘆 手裏に金無きも 嗟嘆する莫れ、

樽中有酒且歡娛 樽中に酒有り 且し歡娛せん。

詩吟兩句神還王 詩は兩句を吟じれば 神か還た王か、

酒飲三杯氣尚轟 酒は三杯を飲せば 氣も尚ほ轟し。

嵬峩狂歌教婢拍 嵬峩なる狂歌 婢をして拍たしめ、

婆娑醉舞遺孫扶 婆娑なる醉舞 孫をして扶けしむ。

天年高過二疏傳 天年は高く(漢の)二疏傳を過ぎ、

人數多於四皓圖 人數は(商山の)四皓の圖よりも多し。

除却三山五天竺 三山 五天竺を除却せば、

人間此會更應無 人間に 此の會 更に心に無かるべし。

(白氏自注) 三仙山五天竺圖多老壽者。

三仙山、五天竺の圖に老壽者多し。

前懷州司馬安定胡果 年八十九

衛尉卿致仕馮翊吉皎 年八十六

前右龍武軍長史榮陽鄭據 年八十四

前慈州刺史廣平劉眞 年八十二

前侍御史內供奉官范陽盧眞 年八十二(5)

前永州刺史清河張渾 年七十四

刑部尚書致仕太原白居易 年七十四

已上七人合五百七十歳、會昌五年三月二十一日於白

家履道宅同宴、宴罷賦詩。時秘書監狄兼謨、河南尹

盧貞以年未七十、雖與會而不及列。

已上の七人合せて五百七十歳、會昌五年三月二十

一日、白家の履道宅にて同に宴し、宴罷みて詩を

賦す。時に秘書監の狄兼謨、河南尹の盧貞は、年

いまだ七十ならざるを以て、会に与ると雖も列に

及ばず。『白氏文集』卷七十一、作品番号云云(3)

致仕の年齢(七十歳)をめであつて迎えた老官僚たちが、陽

春の一日、白居易の邸宅で酒盛りをし、放歌醉舞していま

す。この「尚齒会」は、『新唐書』白居易伝(卷一一九)に

拠れば、當時の人々にも評判となり、その宴席の様子は「九

老圖」という絵にも描かれたとのことですが、その絵画(6)

および「尚齒会」の風習は、北宋時代の中国(7)や、高麗

王朝時代の朝鮮半島(8)、そして日本(9)にも伝えられ、白

楽天の文事にあやかる風雅な催しとして好まれたのでした。

ところで、これは後世の何者かによつて創作された話だと

思われますが、この「(前)九老会」には後日談があつて、

先ほどの白居易を含む七老(七十歳以下の二人を除く)に、

新たに二人の老人を加えた「(後)九老会」というべき集ま

りも催されたという記録があります。

其年夏、又有二老。年貌絶倫、同歸故郷、亦來斯會。續

命書姓名年齒、寫其形貌、附于圖右。與前七老、題爲九

老圖。仍以一絶贈之云、

其の年の夏、又二老有り。年貌絶倫にして、同に故郷に帰らんとし、亦た斯の会に来たる。統いで命じて姓名年齒を書し、其の形貌を写して、図の右に附す。前七老と与せて、題して「九老図」と為し、仍て一絶を以て之れに贈ると云、

雪作鬚眉雲作衣 雪をば鬚眉と作し 雲をば衣と作す。

遼東華表暮雙歸 遼東の華表 暮れに双び帰る。

當時一鶴猶希有 當時の一鶴 なほ希有なるに、

何況今逢兩令威 何ぞ況んや今兩の令威に逢ふとは

洛中遺老李元爽、年一百三十六。

禪僧如滿歸洛、年九十五歲。

洛中の遺老 李元爽、年一百三十六。禪僧の如滿 洛に歸るに、年九十五歲なり。

〔南宋・計有功『唐詩紀事』卷四十九〕

結句の「令威」とは、六朝時代の志怪小説「搜神後記」に見える仙人丁令威を指します。仙術を学び得て鶴となり、千年後に故郷に現れたという伝説です。しかし、この詩に見える年齢「百三十六歳」の老人も、やはり志怪小説において信憑性が感じられません。この詩は十中八九、白居易の作ではなく、後人（おそらく唐末〜五代）の偽作でありましょうが、問題はこのような逸話が生み出された当時の時代風潮にあります。

次に挙げる禪問答も、ほぼ同じ頃に成立したと思われる白居易の逸話です。この話は、五代期に編集された『祖堂集』巻三に初見され、のち宋代の『景德伝灯録』等に再録され、広

く知られていったものです。

杭州鳥窠道林禪師、本郡富陽人也。…（中略）…元和中、

白居易出守茲郡、因入山禮謁。

乃問師曰「禪師住處甚危險。」

師曰「太守危險尤甚。」

曰「弟子位鎮江山、何險之有。」

師曰「薪火相交、識性不停、得非險乎！」

又問「如何是佛法大意。」

師曰「諸惡莫作、衆善奉行。」（10）

白曰「三歲孩兒也解恁麼道。」

師曰「三歲孩兒雖道得、八十老人行不得。」

白遂作禮師。

杭州の鳥窠道林禪師は、本郡の富陽の人なり。…元和中、白居易出でて茲の郡に守たり、因りて入山礼謁す。

乃ち師に問ひて曰く、「禪師が住む處、甚だ危険ならんや？」と。師曰く、「太守の危険なること、尤も甚だし。」と。

（白）曰く、「弟子位は江山を鎮するのみ、何の險か之れ有らん！」と。師曰く、「薪火相交り、識性停まらず、險に非ざるを得んや？」と。（白）又問ふ、「如何なるか是れ仏法の大意？」と。師曰く、「諸惡をば作す莫

れ、衆善をば奉じ行へ。」と。白曰く、「三歳の孩兒も道得た恁麼道を解せん。」と。師曰く、「三歳の孩兒も道得

すと雖も、八十の老人すら行ひ得ず。」と。白遂に師に

礼を作せり。

〔景德伝灯録』卷四〕（11）

白居易が杭州の道林禪師（樹上で座禅していたので鳥窠

「鳥の巢」和尚と呼ばれていた）に仏法の根本義を尋ねたところ、「諸惡莫作、衆善奉行」の解を得、「そんなことなら三歳の子供でもわかる。」と嘲ったが、禪師から「三歳の子供でもわかることだが、八十の老人でさえ出来ないことだ。」とたしなめられたというものです。白居易の杭州刺史赴任（長慶二年「六三」七月「四四」秋）は事実ですが、この話も後世の創作であることは間違いないでしょう。

しかしこれらの話は、おそらく中世以降の我が国の白居易理解において、大変重要な意味を持ったのではないかと、私は考えます。

例えば、鎌倉時代においては道元（一一〇〇～一二五三）がいます。

まことに居易は、白將軍が後なりと雖も、奇代の詩仙なり。人伝ふらくは二十四生の文学なり。或は文殊の号あり、或は弥勒の号あり。風情の聞こえざるなし。筆海の朝せざるなかるべし。しかあれども、仏道には初心なり、晩進なり。況んやこの「諸惡莫作、衆善奉行」は、その宗旨、夢にもいまだ見ざるがごとし。

『正法眼蔵』第三十一「諸惡莫作」(12) 彼は、この「希代の詩仙」に対し、仏教理解に関しては全くの初心者だと酷評しています。しかし、道元のかかる厳しい見方は、決して一般的なものではありませんと思います。

鎌倉時代が終わり、政治と文化の中心が再び京都に集まった室町時代は、「東山文化」に代表される「五山」の文化活動が盛んに行われ、僧侶と文人、そして政治家と芸術家（画

家）とが一堂に会し、「詩画軸」（一枚の水墨画をもとに、その余白部分に僧侶や文人墨客たちが、次々に詩偈や面贊を書き付けてゆくもの）といったものが多数見られるようになります。個々の仏教理解の深浅に関わらず、出家者と一般の知識人たちが交流する風景は、さきの（後）九老会」の遊園雅集圖を彷彿とさせます。

本来九人の士大夫の集会であった（前）九老会」から二人の（七十歳以下の）人物を除き、新たに「百三十六歳」の老人（李元爽。名前から恐らくは道土）と、「九十五歳」の仏僧（如滴。実際に白居易と親交）とを加えて（後）九老会」を再構成した作者の意図は、白居易に代表される伝統的士大夫層（儒教的知識人の集まり）の中に、異端である道教と仏教信奉者を仲良く融合させようとするにあつたと考えられます。そして、その中でなぜ白居易を代表としたかについては、白居易が皇帝文宗の御前において「三教論衡」（『白氏文集』巻五十九、作品番号五三）の講師をつとめたこと（大和元年「八七」十月十日）もさることながら、彼の平素の詩文の中に、仏教・道教に関する造詣の深さを窺わせる表現が随処に散見されるためでもあるでしょう。しかも彼は、それらの詩文中では一貫して「仏教徒になりきれない一介の詩人」という立場を取り続けます。この姿勢は、儒者の側からも、また仏僧・道士の側からも、好ましい態度として受け取られていたのではないのでしょうか。

また、さきほどは道元によって批判的に取り上げられた「諸惡莫作、衆善奉行」ですが、室町時代の一休宗純（一三

九四一（四八一）になりますと、その受け取り方にも、大きな変化が見られます。

白居易問鳥窠和尚、如何是佛法大意。窠曰諸惡莫作衆善奉行。白曰三歲孩兒也解麼麼道。窠曰三歲孩兒雖道得八十老人行不得。靈山和尚每曰、若無鳥窠一語、我徒盡泥乎本來無一物、及不思善不思惡、善惡不二邪正一如等語、以撥無因果、而世多日用不淨之邪師也。故余作此偈、以示衆云。

白居易 鳥窠和尚に問ふ「如何なるか是れ仏法の大意。」と。：（中略）：靈山和尚（『宗峰妙超』）毎に曰く、「若し鳥窠の一語無くんば、我が徒は尽く『本來無一物』、及び『不思善、不思惡』、『善惡不二、邪正一如』等の語に泥み、以て因果（説）を撥無けて、世に多日用不淨の邪師のみぞ多からん。」と。故に余は此の偈を作り、以て衆に示すと、云。

學者撥無因果沈 学ぶ者は 因果を撥無して沈む。

老禪一句價千金 老禪の一句 価千金。

諸惡莫作衆善行 諸惡莫作 衆善行。

須在先生醉裏吟 須らく先生が酔裏の吟に在るべし。

『狂雲集』（13）

一休はこの禪問答を大変重んじています。すなわちこの「鳥窠の一語」は（ここでは彼の師の靈山和尚すなわち大燈國師宗峰妙超の所説としていますが）、禪門一般によく言われる「本來無一物」（この世のすべての物は仮の存在である）や「不思善、不思惡」（善惡による相対的な価値判断を棄て

よ、「善惡不二、邪正一如」（善と惡、正と邪の区別は本来存在しない）などといった觀念論に拘泥した考え方に反省を促し、再び人間の本質を直視させる驚策の一句だと言うのです。そして絶句本文に目を移してゆきますと、「諸惡莫作、衆善奉行」の金言は、すでに醉吟先生Ⅱ白樂天の詩歌の中に会得されていると言うのです（14）。一休にとつて、この「諸惡莫作、衆善奉行」八字は、いわば彼の禪の核心部分に触れる言葉でもあったのです（15）。

詩人と僧侶、すなわち儒家と仏者との交流は、白樂天を理想のモデルとして、後世の日本に広く滲透し、我が國の伝統文化の形成発展に大きな役割を果たしたと言えるのであります。

六 なぜ、白樂天なのか

さて、最後にもうしばらく時間をいただいて、ある一つの問題について、私の考えるところを申し述べたいと思います。

それは、なぜ白居易が、かくも仏教界に人氣があり、在俗の士の代表のように持て囃されたのか、という疑問です。例えば、同じ中国の詩人としてならば、盛唐の李白（七〇一～七六二）や宋代の文豪蘇軾（一〇三六～一一〇一）でも好いのではないのか、とも思われるのです。

しかし、私の結論を申し上げますと、これは、単に白樂天の作品のみならず、彼が生きた九世紀の中國仏教界の實情にも深い関わりがあると思われまふ。つまり、白樂天の後半生

におけるか、強気な仏教否定の発言は、実は、当時の仏教界の側にも、これを甘受せざるを得ない事情があったためだと考えられるのであります。

白居易と同時代の詩人に韓愈（七六八～八二四）がいます。彼は白居易の少し先輩にあたる文人であり、時の皇帝憲宗に対し、「仏骨を論ずる表」をたてまつったことで有名であります。

この「仏骨」をめぐる事件は、皆さんもご存知の通り、最後は韓愈の嶺南左遷によつて一件が落着くのですが、しかしこの韓愈「論仏骨表」の発表は、当時の中国仏教界に大きな衝撃を与えた出来事だったと思われまゝ。つまり、この文章の最大の罪は、「仏教は夷狄の宗教である」という、中国仏教最大の「泣き所」を露わにしてしまったことでありまゝ。

臣某言。伏以佛者夷狄之一法耳。自後漢時、流入中國。上古未嘗有也。昔者黃帝在位百年、年百一十歲。少昊在位八十年、年百歲。顓頊在位七十九年、年九十八歲。帝嚳在位七十年、年百五歲。帝堯在位九十八年、年百一十八歲。帝舜及禹、年皆百歲。此時天下太平、百姓安樂壽考、然而中國未有佛也。……（中略）……夫佛本夷狄之人、與中國言語不通、衣服殊製、口不言先王之法言、身不服先王之法服、不知君臣之義、父子之情。……（以下略）

臣某言す。伏して以るに仏は夷狄の一法のみ。後漢の時より、中国に流入して、上古は未だ嘗て有らざるなり。昔者、黃帝は在位百年、年は百一十歳。少昊は

在位八十年、年は百歳。顓頊は在位七十九年、年は九十八歳。帝嚳は在位七十年、年は百五歳。帝堯は在位九十八年、年は百一十八歳。帝舜および禹は、年みな百歳。此の時、天下は太平にして、百姓は安樂壽考、然り而して中国にまだ仏有らざるなり。……

夫れ仏は、もと夷狄の人にして、中国と言語通ぜず、衣服も製を殊にす。口に先王の法言を言はず、身に先王の法服を服せず、君臣の義、父子の情を知らず。……

〔韓昌黎先生文集〕卷三十九

右の二箇所の引用文中において特に印象が強いのは、「夷狄」と「中国」（国家名というよりは「文化の中心地」というほどの意味に近い）という二つの言葉が繰り返して使われることです（引用文中の傍点は筆者）。

おそらく、このままでは、中国の仏教は死に絶えてしまおう——と、多くの僧たちが震慄したことでしょう。儒教と敵対しては仏教は存在し得ない、何とかして儒教側の知識人を自分たちの味方に付けなければならない、と彼らは思ったのではないのでしょうか。

この「論仏骨表」が提出されたのは元和十四年（八一九）正月、白居易が四十八歳の時に当たります。この時、白居易は中国南方の忠州刺史でしたから、実際に彼がこの上奏文を読んだのは韓愈の発表直後よりもやや遅れたかもしれませぬ。しかしその時期は、本稿にいう白居易の①青年期（第一節）、②壮年期（第二節）、③老熟期（第三節）の、ちょうど②と③の間に当たります。このことは、さきに述べました白

居易の仏教に対する発言の変化にも、大いに関係しているように思われます。

また、九世紀の法難としては、これも有名な武宗皇帝（在位は八四〇～八四六）による会昌の廃仏毀釈運動があります。この実情については、我が国の円仁『入唐求法巡礼行記』にも詳しく記録されているところですが、この事件は、ちょうど白居易最晩年の七老会の時期（八四五）に重なります。本来七名の老人会であつたものに、いかにもわざとらしく、年長の道士と僧侶とを仲間入りさせたのは何故かと考えますに、その説話の仕掛け人こそが、やはり仏教の中国定着を切に願う仏教関係者であつたことに廻ると考えられます。かくして、後世の中国、そして日本・朝鮮半島を含む東アジア社会における白楽天は、中国伝統文化すなわち儒教社会の代表として、仏教を理解し、また仏教を擁護する役割を担つた存在として、ながく記憶され、評価されていたのだと思われまふ。

また、この白居易と僧侶との交流の様子は、日本中世における「僧侶による外交」という慣例にも、臆気ながら当てはまるように思われます。韓愈の文章中にあるように、「ホトケ」は本来夷狄の人であり、中国の言語を解せず、衣服も中国と異なり、中国儒教社会の秩序や礼制を一切受け付けない存在であります。しかし有り難いことに、同時代の白楽天によつて、彼らは中国の士大夫（儒者）たちと何ら分け隔てなく対等に交流する基盤が作られていたのであります。私は、日本の外交使節が、中世以降も殆ど儒者の姿をせず、「法体」

あるいは「道服」を装いつけた理由の一つが、実はこんなところにもあるのではないかと考えます。

白楽天は、中国伝統文化の中においては、儒教と道教・仏教とを結ぶ紐帯的存在であり、また、その国境の外においては、中国と異域（日本・朝鮮・インド・東南アジア諸国）とを結ぶ、まさに平和の象徴（シムボル）でもあつたのです。

注

(1) このシンポジウムのタイトルは「禪と東アジア」であり、私の報告も本来ならば、さらに「禪」に特化したものであるべきだったかもしれない。この日、フロアーから寄せられた質問用紙の中にも、本日私が述べた白居易の仏教思想は「南宗禪」の立場に解釈できるのでは？との助言をいただいたが、「禪」とは何か、また、この時代に分化していた「北宗禪」と「南宗禪」との問題について私の理解はいまだ不十分であり、ここではそれらをゆるやかに包括する用語として「仏教」の語を用いた。

(2) 元稹の妻である韋叢の死と、それに関わる元稹と白居易の詩歌のやりとりについては、陳翀「友の亡妻に代わつて詩を賦す白居易―元稹の妻韋叢の死とその悼亡唱和詩―」（『日本中国学会報』第五十九集、二〇〇七年）を参照。

(3) この詩歌に関する問題は、静永「家から出ない日の詩歌」（勉誠出版『アジア遊学』第一一〇号）「特集・

アジアの心と身体」、二〇〇八年六月）にも述べた。

- (4) 面白いことに、この第一「不出門」詩を作った五十八歳の白居易は、同じ頃、有名な「中隠」と題する『白氏文集』巻五十二、作品番号三七七も詠んでいる。その詩に云く、「君よ、もし高臥せんと欲すれば、ただ自ら深く関を掩せ。……唯だ此の中隠の士のみ、身を致すこと吉にしてかつ安なり。窮と通と豊と約と、正に四者の間に在らん。」と。

- (5) この「范陽の盧真」という人名については、南宋本『白氏文集』では「盧貞」に作り、かつ現在中国で刊行されている白居易の三種の排印本詩文集（中華書局一九七九年・上海古籍出版社一九八八年・中華書局二〇〇六年）でも均しく「盧貞」を正文としている。しかしここでは北宋の歐陽脩らが撰した『新唐書』白居易伝（巻一九）、および明代の馬元調本『白氏長慶集』に従って「盧真」に改めた。下文に盧貞という同姓同名の人物名が登場するためである。中国において同姓同名の人物が同時に顔を合わせるのには差して珍しいことではないが、私は後者の異本を是と考える。「盧真」に作るものは、上述の『新唐書』白居易伝、明・馬元調本『白氏長慶集』のほか、南宋の周密『齊東野語』（巻二十、「耆英諸会」）、明の胡震亨『唐音統籤』（巻四五三）に収録される本文（その第十三丁裏第六行）など意外に多い。また、朝鮮半島では高麗王朝の文人崔滋（一一二八七～一三四〇）の詩文集『拙叢

千百』（我が国の前田育徳会尊経閣文庫蔵）に「海東後耆老会序」という一文があり、これも「盧真」に作っている。

- (6) 「九老図」は、現在も中国や日本そして朝鮮半島に数多く見られる宴集図である。例えば金閣で有名な京都の鹿苑寺の方丈襖絵にも江戸初期のものと思われる「香山九老図」がある。その写真図版は鹿苑寺編『鹿苑寺と西園寺』（思文閣出版、二〇〇四年）に掲載されている。

- (7) 注5にも触れた周密『齊東野語』巻二十「耆英諸会」の条には、北宋時代の例として至道元年（九五五）の「九老会」、至和三年（一〇五六）の「五老会」、元豊五年（一〇八二）の「洛陽耆英会」などが紹介されている。そのうち元豊洛陽耆英会は、仁宗・英宗・神宗・哲宗の四代に仕えた名臣文彦博（一〇〇六～一〇九七）を中心に行われた十二人の集会で、司馬光（当時六十四歳）がその末席に加えられ、同会の序文を執筆した。

- (8) 注5にも触れたが、高麗朝期の文人崔滋（一一二八七～一三四〇）に「海東後耆老会序」という文章がある（『拙叢千百』巻二）。

- (9) 日本の「尚齒会」は、元慶元年（八七七）南淵年名が京都郊外の小野山荘で開いたのが最初であるという（『扶桑略記』・『古事類苑』など）。『本朝文粹』巻九に、その時に参加した菅原是善（八一二～八八〇、道

真の父)の詩序「暮春南陲相公山莊尚齒會詩」が残っている(後藤昭雄『本朝文粹抄2』、勉誠出版、二〇〇九年を参照)。同地はのち比叡山山麓の古刹赤山禪院となり、現在その門前には「我邦尚齒會発祥地」という記念碑(昭和五十一年建立)がある。

(10) この部分、『祖堂集』では「諸善奉行」に作る。

(11) この禪問答については、太田次男「白居易と道林禪師との問答について」(同氏著『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』下巻所収、勉誠社、一九九七年)を参照。

(12) 日本思想大系『道元』上(寺田透・水野弥穗子校注、岩波書店、一九七〇年)を参照。

(13) 新撰日本古典文庫『狂雲集』(中本環校注、現代思潮社、一九七六年)を参照。

(14) 一休『狂雲集』には、この他にも白居易の肖像画に書き記された「白楽天像に題す」という詩もある。

勲業名高白楽天 勲業 名は高し 白楽天、

自然流落絶塵縁 自然流落して塵縁を絶てり。

叢林矢志山林輩 叢林に志を失ふ 山林の輩、

莫訝雙林寺裏禪 訝る莫かれ 双林寺裏の禪。

(*II白居易が参禅した廬山の東林寺・西林寺)

(15) 一休には、この八文字を大書した墨蹟も存在する。

その最も有名なものが京都大徳寺の塔頭真珠庵に所蔵される「一行書」(重要文化財)である。東京国立博物館特別展図録『書の至宝：日本と中国』(二〇〇

六年、その二三六頁)などに写真図版が掲載されている。